

「先生、きれいなお花があった」

岩上 節子

「先生、きれいなお花があった」

そう言って、嬉しそうにお庭（園庭）から帰ってきた子どもの声を背後から聴くときは、ちょっとドキッとする。

ことも限られている。はだで感じることに、雰囲気というなんだか得体の知れないものを使いこなすことに最大限努力するのが、毎日の保育のベースになっているように思う。

五歳児三十二人の子どもの担任を、たった一人で、し

「先生、きれいなお花があった」

かも、子どもたち一人一人の自由な活動を尊重する保育形態の中でやっていく場合、実際に見えている部分は相当に少ない。見るべく努力する部分は、果てしなく多い。目で見えることは限られているし、耳で聞き取れる

そう言う子どもの声を背後から聞くとときは、お花を見つけ、取った時のその子の様子を、私はたいいてい見えない。だから、内心ちょっとギクッとしながら、振り返るのである。

いったいどこのお花だろう……？

大人になると、「人間は、そうそう完璧な生き物ではないらしい」と気付く。「どこか足りないから、いいのよね。人間味があつて……」などと、足りないことをいとおしく思えるようになる。まあいつもいつもそんなに穏やかな気持ちではないにしろ。

でも子どもは違う。子どもは、大人が思っている以上に「足りないこと」には敏感で、「大きくなっても足りないまんま」なんて現実には、絶対に認めたくない。完成体に近づくと思ふからこそ、「大きくなること」に憧れる。毎日毎日「自分はとっても小さくて、未完成な生き物だ」と思い知らされながら生活しているからこそ、どんなに小さなことでも「自分の力でできること」は、子どもにとって宝物になるのである。そしてまた、「素敵なもの」をみつけると、それをとりいれ、自分自身のものにしたいと願う。子どもは、自分の力を信じたいのである。

そして、私は迷ってしまう。子どもの気持ちに共感したいという思いと、子どもの教育をしたいという思いのあいだで。

「先生、きれいなお花があつた」

「あら、よかったわね」

そう言う私の心の中は、ドキドキしている。

花壇のお花かしら？

おやま（園庭の奥の小高い場所）のかしら？

花瓶に生けてあるのじゃないわよね……？

保育者同士の会話の中では、

「雑草はいいけど、花壇のお花はねえ……」とか、「都市にある幼稚園だから、貴重よねえ。自然の草花って……」

とか、「うちの方は、自然が豊かですもの。子どもの成長のためなら存分に……。無くなるほどではないしねえ……」というやりとりは、日々何気なくかわされているように思われる。どの言葉も、その土地、その場所、そ

の幼稚園での現実だ。しかし、保育という仕事にかかわる以上、その発言にいたる根源を意識化したうえで、子どもに向かいたいと考える。

何故、自分はそう思うのか。その中身をきちんと考えているかどうかで、保育の質は変わってくるに違いない。

花壇の花は、誰かが意図的に植えたものである場合がほとんどだ。お花が好きな誰か。庭いじりの好きな誰か。それが仕事の誰か。理由はいろいろあるにしろ、何らかの思いがこめられているのは確かであろう。その思いをくみとる努力をしたいし、してほしいのである。

都市の生活はとても便利なのに、いつもなにかが欠けている感じがする。誰かがつくった物ばかりで人工的だからこそ、誰が種を蒔いたわけでもないのに、いつのまにか芽を出して、たくましく育っていく雑草に心を動かされることもある。その感動から、何かを学びとりたいし、学びとってほしいのである。本来、成長していく

力は生き物自身に備わっていて、それは人間も同じだと、いつも感じていてほしいのだ。

自然の草花は、心にとてもやさしくて、いっしょにいと何だかふわりといい気もち。小枝で弓矢をつくったり、お花の首飾りでおしゃれをすると、いつもよりも素敵な気分。だけどやっぱり考えてほしい。

多くとりすぎていない？

無駄にしている？

本当に必要なものを、必要な分だけもらってる？



ありがたいと感謝してもらってる？

「先生、きれいなお花があった」と嬉しそうな声。

「あら、よかったわね。」と振り返る私。

「あっ、花壇のお花……」

「先生、あげる」

「ありがとう。お部屋に飾ってもいい？」

「いいよ。きれいでしょ」

「うん」

「まだたくさんさいてるよ。もっとあげようか」

「う……んとね、もういい……。あのね、花壇のお花、植えたんだ。あそこ、お花でいっぱいにしようと思ったの」

「えっ、とっちゃいけなかったの？」

「いけないっていうか……」、困る私。その場にいれば、もっと別のかかわりができただろうに……。

「先生、きれいなお花があった。」と嬉しそうな声。

「あら、よかったわね」と振り返る私。

「おやまに沢山あった」

「まだある？」

「沢山あるよ」

「私もみてこよう！」

「こっちこっち、おしえてあげる！」、得意そうな子ども顔。こういう時は、ふってわいた幸運を、思う存分かみしめる。子どもとともに、ただただ喜んでいられる瞬間。何のわだかまりもなく、嬉しい思いを満喫できる瞬間。

「先生、きれいなお花があった」と嬉しそうな声。

「あら、よかったわね」と振り返る私。

「あれれ、随分とったのね」

「うん。ゼーんぶとったんだ。すごいでしょ！」

「う……ん。本当に全部、とっちゃたのねえ……」

「たいへいだっただから！」

「……でしようねえ」

「おうちにもってかえる！ 先生、つつんで！」

お部屋に少しもおうか、他のお部屋にもわけようか、いっそ花屋でもひらこうか。かくして子どもとの相談が始まる。

「全部はちょっと多いわねえ……。他にもわけたらどうかしら」

「先生、きれいなお花があった」と嬉しそうな声。

「あら、よかったわね」と振り返る私。

「あー、だめじゃない！ どうしてとっちゃったの！」

と怒り始める私。これがなかなかとまらない。はあ、誰か私をとめてくれないかなあ。

「先生、きれいなお花があった」と嬉しそうな声。

「あら、よかったわね」と振り返る私。

「あれっ、どうしたのそれ？」

「あっちにおちてたの」

「へえ。昨日の台風、すごかったのねえ。戦後最大って

言っていたものねえ」

「ぼくんち、アンテナこわれちゃったからテレビみられないの」

「わたし、おうちがとんでっちゃうとおもった」、ひとしきり台風体験談で盛り上がった後のこと。ふと園庭の隅を見ると、どう考えても折ったとしか思えない花の茎だけが、ポツンポツンとたたずんでいる。「おちてたの」とはどうやら、「落とし主がいらない」「持ち主がわからない」ということだったらしい。無邪気なのか、頭がまわるのか、判断に苦しむところである。

同じ言葉で始まって、その時、その場所、その人によって、状況は常に違ってくる。違ってくるからいいのだと思う。その違いを大事にしたいと思う。違ったことが、相手にとって嬉しいような、その人にとって意味があるような、そんなかわりができるように、自分の主観を大切に、みがいていきたいと思うのである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)